



視点

振り返ってみて

前にも書きましたが、1983年幹事になって編集局に配属され、会報作りそのものがよくわかってないまま、原稿を書き、集め、校正で苦労したことが今の自分につながっていると思います。初めてのインタビューではインタビューのあり方について教えてもらい励まされたことを思い出します。ある人には自分の考えを生徒に押し付けるのは傲慢だと叱られ、気づかされました。インタビューとは自分をさらけ出した上で、相手の考えや思いを言葉に置き換えるものだと知らされました。インタビューを行うたびに勉強し知識が深まることを実感していたものです。

1987年アメリカ性教育研修ツアーからの帰国後、編集局のメンバーで、今後の会報のありかたについて何度も話し合ったことを覚えています。外部の方にもアドバイスをいただきましたし、印刷所の高木プリントさんにも何度も相談しました。

どうすれば読みやすくなるのか。まず言われたのが会報のネーミングでした。考えた末に“人間と性”が誕生し、1頁に「視点」ができ年間10号発刊になりました。レイアウトも変更し、見開き重視の構成にしたことを覚えています。

- ① 性情報提供例 自分が1988年「同性愛プロジェクト」立ち上げに関わったこともあり、幹事会プロジェクト報告も入れさせてもらいました。性教育にセクシュアリティという面を紙面に載せることで意識してもらおうと考えました。
- ② 会員の声例 「本部が与え地方が受け取る」という感覚ができてしまわないようにサークルからの活動報告や企画を大事にするようにしました。
- ③ 幹事会からの情宣例 もちろん機関誌としての性格は最優先でした。

これら3本の柱で構成したのですが、同時に編集局員が自己研鑽にもつながるように、性教協から外に出てインタビューや講演会参加することも積極的におこなったこと、本の紹介「読んだ」も対象を会員以外に広げて紹介しました。

しかし、それらが一変したのが性教協バッシングで

した。1992年のいわゆる「性教育元年」以降、一方で性教育がメディアにも載るようになり、教育現場でもおこなわれ始めました。統一協会のダミー団体や政治家が性教育、ジェンダー教育への攻撃を始め、性教協へも。2002年『思春期のためのラブ&ボディBOOK』攻撃に端を発して行政までもがバッシングに加わり、会報も性格を変えざるを得なくなっていきました。権力を持つ側からの攻撃にさらされたことは性教協会報に多大な影響を与え、攻撃に対する防御と反撃を誌面に大きく取り上げることが増えました。正確に言えば、バッシングへの対応は僕が編集局長を交代した後のことなのですが、会報作りに関して僕らが苦労して作りすそ野を広げてきたものが、外部からの力によって甲羅を固めていったように感じました。まさに「性(教育)は政治」を実感しました。

これからの編集局の皆さんに伝えたいことの一つは、3本柱のバランス感覚を大切にしてくださいということです。会報は会員が性教協会員であることを実感できる場であるのです。

また、これからの性教育においても、ジェンダー、セクシュアリティ、人種や宗教などの局面で交わることで見えにくくなっている差別や抑圧を解き開いて見えるようにしていく「インターセクショナリティ」がキーワードになるはずですが、「包括的」をあらゆる世代にどう実践として落とし込んでいくのか、性教協が担うものは大きくなるばかりです。

そして、性教協には性教育界のトップランナーとしての発信力が求められています。会報“人間と性”は会員による会員のための会報です。

雑誌『季刊SEXUALITY』と重なる部分はありますが、発信する力は重要です。期待しています。



貴志 泉

(元編集局長1989年9月～1996年8月)